【性教育を学校の日常に】「物を置く」から始めよう

2022年9月14日

子どもに正しい性知識を届けたい――。そんな思いを胸に、23歳で一般社団法人を立ち上げた鶴田七瀬さん。「『知らなかった』と傷つく人をゼロに」を目標に掲げて活動する鶴田さんが思い描く、「性教育の日常化」とはどのようなものなのか。インタビューの第1回では、「性教育トイレットペーパー」の開発経緯、日本の性教育の現状と課題などについて聞いた。（全3回）

この特集の一覧

- 性教育を学校の日常に

大切なのは「接点の多さ」

――鶴田さんの取り組みで特に有名なのは、性に関する言葉やイラストを印刷した「性教育トイレットペーパー」ですね。これはどういったものなのでしょうか。

対象年齢が小学生以上の性教育教材で、性暴力について学ぶもの、体の仕組みについて学ぶもの、性的同意について学ぶもの、セクシュアリティについて学ぶものの4種類を用意しています。「月経」「射精」といった体の仕組みや、性暴力の被害者・加害者にならないために必要な知識などを、親しみやすい言葉やイラストを使ってプリントしています。プライベートゾーンや性的同意についての話など、学校教育では扱いにくいトピックも数多く扱っています。

――字や絵を印刷したトイレットペーパーは以前からありましたが、性教育につなげるという発想は画期的ですね。どういったきっかけで作られたのでしょうか。

私は大学生の時に、「性教育について学びたい」と思ってデンマークやオランダなどに留学しました。「性教育トイレットペーパー」は、そこでの経験がベースになっています。デンマークでは学校でも家庭でも性についてオープンに話されていることに驚き、日本との最大の違いがどこにあるか考えました。そして、「性の話に触れる接点の数ではないか」と考え、「日常の中に性教育を取り込む」を自身のテーマに据えようと決めたのです。

留学した2018年ごろはまだ、「性教育とは性行為の仕方を教えるもの」という風潮があり、性犯罪の被害を防ぐ予防教育の面は不十分でした。性的なことだと分からないうちに性暴力を受け、理解できるようになってからショックで人間不信や精神疾患、就労困難などになる人も少なくありません。

性に関する知識は「インターネットなどで得られる」という意見もありますが、そうした情報にアクセスするのはすでに性教育に興味がある子で、自らアクセスしない子にも正しく届ける必要があると考えました。

――その第一歩が性教育トイレットペーパーなのですね。

鶴田さんが開発した「性教育トイレットペーパー」

日本では「子どもに性の話をするのはタブー」と考える大人が多く、子どもの側も「恥ずかしい」「悪いことだ」と感じて質問や相談がしづらかったり、「性について学ぼうとしていることを知られたくない」と感じていたりします。その心理的ハードルを下げるため、誰にも見られずに絵本のように読めて日常的に使えるものとして、性教育トイレットペーパーにたどり着きました。

より多くの子どもに見てほしいので、個人の家庭や小中学校の他にも、公共の図書館や児童養護施設にも置いてもらうよう呼び掛けています。

――トイレットペーパーに載せるトピックはどのようにして選んだのですか。

ユネスコの国際セクシュアリティ教育ガイダンスを基に、親が子どもと話しやすい内容を中心に選びました。その上で、医師や専門家の監修を受けました。

私にとっての性教育は、知識を伝えることだけではありません。性について質問したり、困ったときすぐに相談したりできるようなコミュニケーションの場を整えることも、性教育の一環だと考えています。

そのため、家庭や学校などで大人と性について話すきっかけになるよう、一つのことを深く掘り下げるよりも、身近なテーマを満遍なく伝えられるように意識しました。具体的に、「月経」「射精」「受精」「妊娠」といった体の仕組み、「性的マイノリティー」「性的同意」の概念、「性暴力」とはどのようなことか、「性被害」に遭ったらどうしたらいいのかなどを扱っています。

教職員向け研修での手応え

――教職員を対象にした研修も行われていますね。学校での性教育の現状を、鶴田さんはどのように受け止めていますか。

性教育に対し「取り入れたいが、さまざまなハードルがある」と感じている先生が大半だと捉えています。「保護者に批判されるのではないか」「子どもに質問をされたときに、どう答えていいか分からない」と不安を抱き、その結果として性に関わることを学校で扱うのをタブー視している傾向があるのではないでしょうか。

ただ、日本の学校現場が性教育に踏み込めず、消極的になりやすいのはやむを得ないことです。学習指導要領に、高校生になるまで性交や避妊、中絶を取り上げないとした「歯止め規定」があるからです。また、今の学校教育は学習内容がとても多いため、性教育の優先順位が低くなり、後回しにされている側面もあると思います。

タブー感だけではなく、予算や時間のほか、先生方が性教育について知る機会が少ないことが課題だと感じています。現状のままでは、子どもが性を正しく知ることができるかどうかは家庭次第ということになってしまいます。だからこそ、全ての子どもに届けられる環境を整えていく必要があります。

――研修ではそうした問題の解消を図っているのですね。

ソウレッジが開発した性教育ボードゲーム「ブレイクすごろく」

研修の目標は先生方が性教育を取り入れるための一歩を踏み出すこと、そして必要な知識を得ることです。そのために、研修ではボードゲームを先生同士でプレーしてもらいます。「性の課題を学ぶ人生ゲーム」と題して、教員や保護者などの大人や高校生を対象に開発した「ブレイクすごろく」というものです。5歳の子どもが大人へと成長していく中で、各段階で直面する性の悩みや、現代の子どもが生きる環境について学べるようになっています。このすごろくは、統計データや若者の声を反映して作成しました。

例えば「先生の胸を触ったら怒られちゃった。お母さんには怒られたことがないのに」というマスでは、「胸を触った子がこのような行為を繰り返さないために、どのような声掛けをしますか？」というクイズを出し、解説の冊子を読んで学べるようにしています。

同じ学校の先生でも、年齢や性別が違えば性に対する知識や問題意識は異なります。そうした先生方が、ゲームを通じて楽しくコミュニケーションを取りながら、それぞれの経験や問題意識について意見交換をするための教材です。

――講義形式ではないのですね。

私は医師や看護師、助産師などの資格もありませんし、社会人経験も浅い一介の若者にすぎません。そのような人間が「教えよう」というスタンスで臨んでも、「学ぼう」と思う人は少ないでしょうし、伝えたいことを受け取ってもらえるとは限りません。

それよりも、先生同士でボードゲームをした方が、互いに話し合うことで意識を高めたり、解説の冊子から知識を得たりできます。「子どもが使っているパソコンから『セックス』という検索履歴を見つけたらどうする？」というトピックに対し、「放置する？」「もし放置したらどうなる？」などと皆で

話し合い、当事者意識を持って考えるきっかけにもなります。正しい情報を知り、「教員でも性教育については知らないことがたくさんある」という感覚を共有してもらうのが狙いです。

――研修後の反応はいかがですか。

研修前は「学校で性教育はやりにくい。家庭でやってくれるといい」「小中学生には早い」と話していた先生が、研修後は「学校でやらなければ」と声に出してくれるようになりました。保護者にどう説明するかなど、具体的に検討してくれる学校もあります。

「今までの研修で一番楽しかった」「感動した」という感想を述べてくれる先生もいました。意図を受け止めてもらえたという手応えを感じています。

「物を置く」ことから

――学校で正しい性知識を子どもに届けるために、まずはどのような行動を取ればよいのでしょうか。

「まずは物を置くことから」と話す鶴田さん

「物を置く」ことから始めるのがお勧めです。性教育の本や生理用品をトイレに置いたり、性の情報が書いてあるポスターを張ってみたりしてはいかがでしょうか。男女で分けて考える必要はなく、生理に関わるポスターを男子が使う場所に貼ってもよいと思います。

関心を持って「生理って何？」と聞いてくれる子がいたら、一緒に本を読むなどして知識を伝えればいいですし、性知識などを伝える教育動画を見るという方法もあります。

――鶴田さんが立ち上げたソウレッジでは、そうした製品や動画も提供しているのですね。

性教育そのものというより、そこにたどり着くための最初の一歩へと導くことがソウレッジの役目だと考えています。法人名は、「sow（種をまく）」と「knowledge（知識）」の掛け合わせです。知識の種をまき、その種を大切に育て、自分と相手の心と体を大切にできる人が増えるようにとの願いを込めました。

子どもと関わる一人一人の大人が、自分ができる範囲で性知識を伝えていけば、悩み苦しむ子どもを減らせると信じています。正しい知識にアクセスできる接点を増やしていくことが、子どもを守るセーフティーネットになるのではないでしょうか。

（小松亜由子）

この特集の一覧

- 性教育を学校の日常に

【プロフィール】

鶴田七瀬（つるた・ななせ） 1996年生まれ、静岡県出身。性教育の先進事例を学ぶため欧州など5カ国に留学し、帰国後の2019年に一般社団法人ソウレッジを設立。「性教育トイレットペーパー」や性知識を学べるボードゲームなどを開発した。性教育の日常化を目指した独自の活動が評価され、21年度Forbes 30 UNDER 30 JAPAN「世界を変える30歳未満の30人」や、社会活動に従事するユースリーダーを応援する「若者力大賞ユースリーダー賞」を受賞。